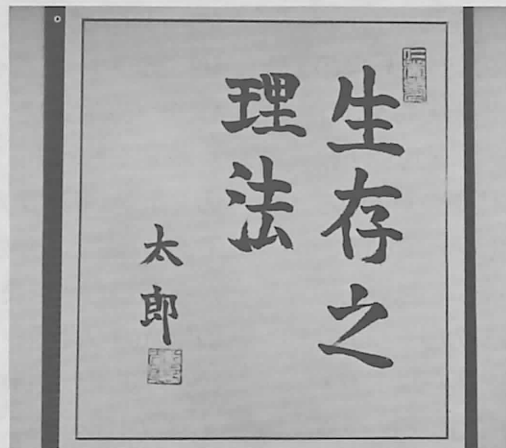


生存科学研究所

ニュース

Vol.3 No.2.

1988.3.10発行



目次

- 巻頭言「ハーバード武見講座の萌芽」 藤野志朗 … 1
- 技術社会と「貧乏物語」—第37回生存科学研究会 …… 2
- 医療経済原則の変革と提言 …… 3
 - 第9回メテコ・エコノミックス研究委員会
- 科学技術政策からみた技術と安全 …… 5
 - 第8回医薬品産業の長期展望に関する研究分科会
- 生存科学ビュー・ポイント「Humanismと生存科学」…… 6
- エッセイズ・キュート「情報処理の難しさ」 …… 7
- 維持会員だより …… 8
- ハーバード大学公衆衛生大学院武見講座活動報告 …… 9
- ニュース・オブ・ニュース …… 10
- 「第2回生存科学研究会総会」の御案内 …… 11
- 公益信託武見記念生存科学研究基金ニュース …… 12
- 生存科学研究所ニュースに関するアンケート集計結果報告 …… 12
- 編集後記 …… 15

発行：財団法人 生存科学研究所

〒104 東京都中央区銀座4-5-1
聖書館ビル303

電話 03-563-3518

ハーバード武見講座の萌芽

中央大学経済学部教授 藤野志朗

ハーバード大学公衆衛生学部学部長ハイアット博士に別れの挨拶のためワレスギービルを訪れたのは1981年2月20日の午前のことであった。当日は雨模様の日で、その夜には丁度ボストンに短期滞在で来られていた、いまは亡き一橋大学教授の時子山君とボストンシンフォニーでアスケナーシュを聴く予定であったし、その前にも2、3の友人と昼食の予定があったので、ハイアット氏のもとへすぐ去るもつりていた。ところが、彼は目下彼が手がけているメキシコでの仕事やアフリカの医療問題について熱心に話し込んでいて、私自身は少々心が焦せていた。私は翌日の21日に下宿を払いケンブリッジのリージェント・ホテルへ1泊。その翌日の22日はエア・シャトル便でボストンを発ちニューヨークへ行く予定であった。この間ほとんど時子山君が車でアテンドしてくれる手筈になっていた。

さて、別れの挨拶の最後でハイアット氏は22日の午餐にささやかなパーティを開くので是非出席してくれといわれ、予定外のことではあったが1時間位はエア・シャトルの関係で如何ようにもなるし、時子山君が車ですべて空港まで面倒をみてくれることになっていたので出席することにした。

ハイアット氏の自宅を訪ね、実は下の道で友人が車の中で私を待っているのだがというと、是非その友人も参加するようにしてくれということで時子山君も一緒した。パーティは途上国の人3名を含むごく小人数のもので

あった。別れぎわに、ハイアット氏が、実は自分が目下考えている医療問題を日本と共同研究したいのだが、どのような人にアプローチしたらよいか、とたずねられた。そこで、その話しの内容をよくきいて、それでは武見先生にコンタクトをとるのがよからうと話した。ハイアット氏は最近の彼の印刷物を数点私にあづけ、これを武見先生に是非渡してほしいと依頼された。

帰国後一年振りで先生にお目にかかり、この一年間の御病気が先生にとって大変なものであったことを痛感しながら、ハイアット氏からあづかった資料をお渡した。その年WMAのフォローアップ委員会が開かれることが決まった折り、武見先生から呼ばれハイアット氏を招くことの是非をたずねられたので、是非そうされることをお勧めした。

ハイアット氏は委員会中に大変武見先生の健康政策の思想と実践に深く打たれたという。委員会終了後、彼は私に、たとえばの話として、ハーバードに武見思想にもとづくプログラム（武見プログラム）をつくることを先生に提案したいのだが、意見をきかせてくれとのことであった。それは直接話し合った方がよいと思い、先生のアポイントメントをとって、ハイアット氏と2人で麻布の先生の御自宅にお訪ねした。最初先生は、なんとなくうさんくさい、といった感じでハイアット氏の話をかかれていたが、ハイアット氏の意図するところを理解され、最後にこのように言わ

れた。ハーバードに武見冠講座が出来、そこで自分が常日頃考えている問題が多く研究者によって、世界的に地球的規模で展開されることは大変結構なことであり、その講座をハーバードにつくることにしよう。これは1981年7月29日の午後のことであった。

人と人との出逢いが不思議なものなら、このような出来事の成就も不思議なものである。

たしかに武見先生の偉大な思想とハイアット氏の卓抜した理解力がうまく出会えたこ

とがすべてであるとはいえ、もしあのとき時子山君がボストンに居なかったら、この話は成立していなかったのではないかと思う。私は前述の如くボストンを去る直前で、もう車もなく、すべて時子山君の善意と車に依存して移動していた。時子山君の善意がなければ、私は22日のハイアット氏のパーティに出席しなかったに違いないし、そうであれば、武見講座は実現していなかったかもしれない。

物事の成就とは真に不思議なものである。

●第37回生存科学研究会

技術社会と「貧乏物語」

1月16日(土)午後2時から、大手町の経団連会館会議室において、第37回生存科学研究会が開催された。講師は大阪大学社会経済研究所教授の筑井甚吉先生で、昭和55年に日経経済図書文化賞を受賞されている。

先生は河上肇の「貧乏物語」の時代から現在の技術社会に至る社会的・経済的变化について、以下のように講演された。

* * * *

最近是新保守主義とよばれる風潮の下で、自由のみが強く叫ばれ、平等が忘れられている。そして貧富の格差は拡大し、一億総中産階級という一体感は失われようとしている。その背景には、技術社会における国内及び国際競争の激化に伴う経済効率主義や能力主義の社会一般への浸透がある。これらの結果として、家族制度は崩壊し、それを支える倫理も忘れ去られようとしている。老人は効率優先の社会から見捨てられ、人間らしい死に方が出来ないのではないかと憂いている。これで良いのかと疑問を抱いている人々もいない

わけではない。

そこで河上肇の「貧乏物語」を読み返して、その後の70年間の社会的・経済的变化を考えてみるのも意味のないことではないであろう。河上は、人間らしい生活を不可能にする貧困の原因として、次の三つを挙げている。1) 資本主義のもとでの自由競争の経済体制の、2) 現に存在する貧富の格差、3) 富者の贅沢。そして、これら三つの原因の少なくともいずれかを取り除かなければ、貧乏は無くないという。そして現在の経済学の知識からすれば極めて意外なことに、第3の富者の贅沢の廃止を救済の最重要策として挙げている。これは河上の意図とは逆に、現在の知識からすれば、有効需要の不足を生じさせ生産の縮小による失業の増加、すなわち貧困の増加を招く政策であるといえる。河上はさらに、所得と富の再分配を示唆する第2策を越えて、第1策の経済体制の社会化あるいは資本の国有化政策へと飛躍する。しかしながら、この政策も現在までの社会主義国家の成果をみる

と、官僚体制の非能率と保守性に基づく経済的停滞や一党独裁による人権無視等、満足すべきものとはいえないのが事実である。

「貧乏物語」以後の70年の歴史を考えてみると、実は第2策が貧困の除去に対する最も実りある政策であったと考えられる。自由体制のもとでの人間の自由な創意工夫の発揮が経済的な発展をもたらし、累進税制度と社会保障による所得と富の再分配が国民の社会的結束を固めて社会の安定をもたらした例は、最近までのわが国や北欧の福祉諸国にみられるところである。新保守主義はこのような成果を捨てて歴史に逆行し、貧富の格差や社会的強者と弱者の差別を国際競争力第一主義のもとに是認し、社会的安定を崩壊させようとしている。われわれはここで、経済成長を減速しても技術社会と伝統的な文化や倫理との調和を考え、各人が人間らしく生きそして死ねる社会はどのような方向にあるかを沈思してみる必要があるのではなからうか。

* * * *

以上の講演のあと産業医科大学土屋健三郎学長の司会で、活発な質疑・討議が行われた。演者の「経済的成功は、遺産と遺伝子および天の時、地の利、人の和がもたらしたもので、このような故なくして得た富に対しては応分の負担を課し、1対10の範囲内で再分配を行うべきである」との反説を中心に、参加者から①1対10の格差では新しい文化は創造できないのではないか、②能力は遺伝するのか、

③後天的な努力をどのように評価するのか、④利己の中にこそクリエイティブな基本があり、人間は本質的に利己と利他の両者を備えているのではないか、⑤富の分布と「パイ」の大きさのファクターはどのように考えるべきか、⑥国際間の再配分についてはどのようにすべきか、⑦アダム・スミスは「国富論」の以前に「道徳情操論」を著しており、両者を並列的に捉えるべきではないか等沢山の質疑が出された。演者はこれらの質疑に対し、利己が悪で利他が善という単純なものではなく、集団への参加のモーメントを失わせない範囲での再配分が、歴史的にみても社会の安定をもたらすだろう。国際間の再配分については国家主権の問題が絡むので、より困難になるであろうとまとめられた。

* * * *

今回は第2回生存科学研究会総会として4月2日(土)「ハイテクと国際競争」のテーマで、大江精三先生に演者になっていただくことが満場一致で決定した。会場は経団連9F、午後2時から。

今回下記の3名の方が本研究会に入会を申し込まれた。今回初めて出席された新会員の自己紹介が行われた。

生存科学研究会新会員(順不同 敬称略)

安達幹郎

上原鳴夫

慶応義塾大学医学部三四会

●第9回メディコ・エコノミックス研究委員会

医療経済原則の変革と提言

昭和62年12月19日午後2時から、研究所会

議室において第9回メディコ・エコノミック

ス研究委員会が開催された。今回の講師は、慶応義塾大学大学院経営管理研究科助教授の田中滋委員。標題は「医療経済原則の変革と提言」。氏は先ず、医療経済学は基本的には経済学のテクノロジーを使っておこなう学問であるとし、ヘルスエコノミクスとメディコ・エコノミックスについての見解を述べ、さらに、国庫負担削減によるコストシフトが医療変革の原因であると以下のような分析を行ない、最後にマクロ経済の視点から医療について氏の意見を述べた。

* * * *

最近の厚生省は医療費抑制を言っていない。それにもかかわらず、それを医療費抑制として反対が起こる。それは医療国庫負担の私的セクターへのシフトを見取った反対か。私的セクターへのシフトで競争激化が予想されるからの反対か。国庫負担の削減は、医療費の増大からではなく、年金支出の増大から要求される。短期保険の医療と違い、年金は長期保険であるので、政府に支払う法的義務が残るからである。

生活保護を国保に移管することで国庫負担は100%から45%に削減出来る。

国保から政管健保への移管で国庫負担は13%に削減。さらに組合健保へ移管すれば国庫負担は0%となる。

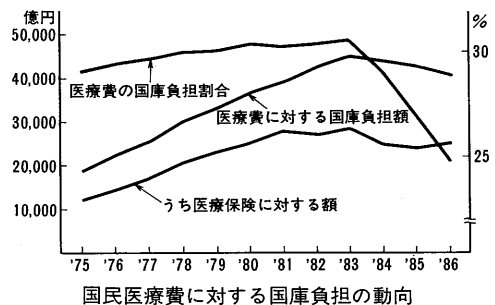
退職者医療制度も国庫負担削減となる。

福祉医療制度は低所得者を国保から切り放すが、もともと保険料の殆ど徴収できない層であり、それにより国保内の中・高所得者の保険料を軽減するという国保側への魅力もたせ、同時に市町村、都道府県、国という3者による負担ということで、都道府県の負担を導入し、国の負担を軽減できる。さらに、

これに国が特別交付金を出すが、医療費の地域格差の大きいところへはそれを出さないとすることで、医療費地域格差是正のインセンティブを都道府県に与え、都道府県による医療抑制を図れる。しかしこの際使われる基準医療費の考え方は、医療の標準化という恐ろしいことに繋る。

一方、健保連は医療機関の逆指定と組合による単価交渉を主張する。また、サービスの個別化の傾向がみられ、それは医療の階層化に繋り差別を生む。

マクロ経済の観点から医療を見ると、英国が社会保障を高くしたからGNPが低くなったといわれるが、それは違う。英国のGNPが低くなったのは、生産手段を国有化して、効率が下がってしまったからである。社会保障の高度な北欧各国は、高いGNPを確保しているし、高い所得税率下でも国民は満足している。北欧は、国が生産を国有化するのでなく、分配に介入しているので成功している。その分配への国の介入も、北欧は政府からの移転が多く、国民に還元されている。我が国の場合はそれが少なく、政府支出や投資が多い。我が国は医療や年金にもっと金を出しても大丈夫なはずである。21世紀は若者3人で老人1人を養うようになるというがそれも間違いである。健康な高齢者が増えれば、働ける人と被扶養者との比率も変わる。



●第8回医薬品産業の長期展望に関する研究分科会

科学技術政策からみた技術と安全

昭和62年12月5日に開催された分科会は、生存科学研究所研究員辛島恵美子女史が標記テーマで講演を行なった。その概要は以下のとおり。

* * * *

科学技術政策には、それを推進する側面と規制する側面とがあり、前者は比較的楽天的にも可能であるが、後者の取組みはその性格上シビアにならざるをえない。権利と権利、感情と感情とのぶつかりあいがあって、科学的知識だけでは割り切れないし、解決がつかない。「安全」という言葉一つにしても使う人によって意味が異なり、言葉の整理が必要である。

21世紀型科学技術における推進・規制のあり方を、その典型的な例—バイオテクノロジー—について考えると、その安全性評価は、「何がハザードか」が解らないという点で、大変むづかしい。これからの科学技術は、解らないことの多いなかで、合理的事前評価により進めていくことが肝要であるが、しかし、そのためには、情報の収集・監視等による「後の備え」が重要になる。

例えば、医薬品に関しては、安全性評価試験は比較的確立しているように思われるが、それでも第2のサリドマイドはありうる。それを防止する為にも情報収集に要する費用は膨大なものとなっているが、それによって得られたデータは、役所の許可をクリアするための役割しか果たしておらず、大部分は各企業バラバラに死蔵され、充分には生かされ

ていない。これらの情報を総合的体系的に収集出来れば、解決することは多く、投入費用も生きてくる。一般に誤解されているが、特にマイナス情報は重要であり、ハザードがはっきりしていれば、むしろ安全問題の対応は易しい。

バイオテクノロジーなどでは、今のところハザードは反想的なものにすぎず、杞憂かどうかすら解らない。完璧な安全性評価方法を開発し、企業はそれをお墨付きの形で受け、クリアしていこうという考え方では、この問題の解決は期待できない。現実的判断を出すには、事前の評価の仕組同様、あるいはそれ以上に「後の備え」のためにどのような仕組みをもつかが解決の鍵となっている。

安全問題は、食品、医薬品、農薬等々というように個々バラバラに問題にされるのではなく、総合的に解決を図るための展開が必要であり、社会制度・行政・教育制度など中心的・共通的な課題をどうすれば良いかを併せて考えていく必要がある。安全学とはそうしたことの学的根拠をめざす総合学であり、狭義のテクノロジーアセスメントから安全規準や基準のあり方までを同一の土俵で論ずる実践学でもある。

* * * *

講演後の討議では安全性にかかわる企業の対応やマスコミの報道のあり方等が話題となったが、「〇×式の考え方を改めなければならぬ。そのもの自身の性質として安全性があるかどうかの問題ではなく、行為者の安全と

第三者の無事が図られることであり、使い方、正しく使いこなす為の仕組みが問題にされな

ければならない」と演者は強調している。

●生存科学ビュー・ポイント

Humanism と 生 存 科 学

亀井クリニック院長・生存科学研究所理事 亀井康一郎

昭和50年10月、第29回世界医師会東京総会が開催され、武見先生が世界医師会会長に就任された時、特別講演は、京大名誉教授吉川幸次郎先生がされた。講演は、英語でされたが主題は“東洋におけるヒューマニズム”であり、訳文が出版されるに及んで更に感銘を新たにしたものである。吉川先生はHumanismとは、英国の辞典によれば、人間性の宗教である。Religion of Humanityと記述されており、人間の価値を強調するものである。又、Humanityとは、他の人に対する親切心——動物にすら対する親切心である、と定義されていると説明された。Humanism乃至Humanityに対するこの考え方は、基本的には、西洋においても、東洋においても変りはないけれども、特に“東洋における”という文言を演題に附した理由は、文明の表現のあり方が世界各地によって異り、中国、日本を含む思想の底流には、人間以外の世界に対して、又は超自然的なものに対する尊重ではなく、われわれ人間自体の価値の尊重に主点があるからであると述べられている。

これに関して思い出すことの一つは、私が昭和47年5月、日本医師会社会保険委員会委員に任命され、第1回の委員会に出席した時のことである。武見先生が最初の挨拶の中で強調されたことは、“これからの社会保険に

は、Mindの再配分が必要である。この点について委員はよく研究するように”とのことであつた。先生が退席されたあと、われわれ委員の間で、“Mindの再配分”とは一体何であるかの論議が起つたのは言うまでもない。私も含め、恐らく凡ての委員は何のことやら解らなかつたと思う。私も今もって理解出来ているとは言えないが、15年以上の年月を経た現在、過去のことどもを省みる時、武見先生が御自分が会長に就任する世界医師会総会の特別講演者に、何故吉川先生を招かれたかの意味が、臆気ながら解ってきたような気がするのである。

Mindの再配分→Humanism→生存科学という一連の考え方は、福祉立地論、乃至は昭和30年代初期、『中央公論』に掲載された人口構造の老令化への警鐘を鳴らされた論文に、既にその胚種が存在していた。それが最終的に広がりと深さをもって、少々厳しい生存科学という名称に集約して行ったように思うのである。

それ故、武見先生の生存科学という名称の中、生存という言葉の内容には、色濃く東洋的な人間価値観が存在すると考えられ、と同時に、科学という西欧論理の典型的な対象的認識の方法論が、それと融合した形で存在しなければならぬという意味が含まれてくる。これはなかなか至難な業であろう。

玉城康四郎教授によれば、通常、われわれにとって認識というのは、対象的認識であり、自分に対して物、主観に対して客観というように、相互関係において成立するものである。従って対象的認識が人類にとって普遍的であることはいうまでもない。しかし、これに対して全人格的思惟は、主観、客観一体となっている思惟であり、そのように努力しなければできない思惟である。放置したままでは自然に対象的思惟になってしまうものである、と説明されている。この全人格的思惟とは、極めて東洋的人間価値観と近似しており、武見先生の言われる生存の核心的意味に最も近いものであろう。

これと、科学という対象的認識とに、どのようにかけ橋をつくり、どのように融合の接点を見出して行ったらよいのであろうか。或いは、あくまで次元の異なるものとして階層的に理解して置くべきものなのであろうか。

この問題について、単に思索をめぐらす時は何処まで行っても平行線であるが、医療と

いう場合は、この融合を可能にする唯一の場であるように思える。

心身に苦悩と苦痛を蒙った人間を、平常の状態に戻すには、対象的認識と全人格的思惟の両方が、同時に作用する必要があるからである。病むことによってこのような作用が、再確認される時、病むことも人間にとっては偉大な一事象なのである。このように医療は人間の身体を扱うという意味で現実そのものであり、人間の心を扱うという意味で思惟的である。これを切り離すことは出来ない。

医師である武見先生が、生存科学という発想を得られたのも、極く自然であったのではなからうか。

多岐に亙る社会システムの中で、個人と集団の心身の反応形式の差違、疾患の治療、予防のみではなく、通常健康を更に増進することの社会的意義の自覚、等々は、Humanismと生存科学の理解と実践によって為されることを、武見先生は予言されていたと思うのである。

●エッセイズ・キュート

情報処理の難しさ

最近、日本のA機械メーカーが、アメリカのBデータ・バンクに、特定商品の流通についての情報を依頼した。半日もたたないうちに、ファクシミリを使って、データが送られてきた。百数十ページ、まるで「洪水のように」流れてきたと担当者。

しかし、データが全く整理されていないために、結局役にたたなかった。「20万円近い大金を払ったので、捨てるに捨てきれないでいる」とデータを見せてくれた。

「それにしても、誰かが、これだけのデータを集め、誰かがこれをコンピューターにインプットしたことだけは確かですね」と感心すると、

「インプットの作業は、根気よくやれば誰でも出来ることですが、これだけの情報をどうやって集めることが出来たのか、日本では想像出来ませんね」

この担当者はこういつて、更に

「私は長く情報処理に携わっていますが、

問題はコンピューターではない、ということが分かってきました。コンピューターの処理能力はどんどん上がってゆくの、こつこつ情報を集める人間の能力は殆ど上がっていないのです。ここがポイントです」

「しかし、コンピューターの情報処理が早くなったので、そのぶんだけ楽になったでしょう」

「数量化できるデータについては、そうい

えますが、数量化できないものも沢山あります。そこは、人間がやらねばなりません。

たとえ、数量化出来るものにしても、これが使いやすいよう整理されていなければ、ただ情報の洪水に流されてしまうだけです。

問題は、コンピューターの前と、コンピューターの後にある、と痛感しています」

こう語った。(〇)

維持会員だより

生存秩序と遠野宣言

昭和47年6月25日、第24回岩手県医師会総会に於いて、時あたかも第1回人間環境会議が、ストックホルムで開催された記念すべき時でもあり、次のような決議が挙げられた。

「現下わが国の高度経済発展に伴い、大気は汚染され、水はよごれ、緑は失われた。その結果、人間の健康は損われ、精神は荒廃をきたした。日本国民の健康を守るため、空気と水と緑の保全に万全を期し、かけがえのない地球を守るべく、われら医師会員は一段と努力する。」である。この決議文が、美しい自然に囲まれた民話の里、遠野市で採択されたことから、われわれ医師会員は、「遠野宣言」と称し、心の拠り所としているが、これがまた、岩手県医師会活動の源泉となったことは言うまでもない。しかも、注目すべきは、八木義郎元岩手県医師会長が、10年後の昭和57年11月1日号の日本医師雑誌に「岩手県における地域医療」を掲載し、その中でさらに「遠野宣言」が、地域医療の指標となっていることを確認していることであり、その命脈は生き生きと今日に及んでいる。

当時は、一見奇異に思えたが、それは、武見先生の次の一言で、唐突でも、偶然でもないことが理解されると思う。

昭和45年6月28日、第22回岩手県医師会総会が気仙医師会の担当で開催された時武見先生が陸前高田市民会館で一般市民のために「医者から見た社会」と題し、特別講演を行っているが、その中で、「僕は毎年岩手県に来るといって、実はここにいらっしゃる県医師会長先生、こいつ不思議だと思ってるらしいんです。処が僕は、岩手県ってところは来ると大変気分がいいんです。第一、空気がいいんですね。緑の色が上等なんです。この中から、高野長英や、原敬や、後藤新平が出たかと思うと、いささか一年の内に一日か二日、あやかりたいという気分があるから、僕は毎年来ることにしてあるんです。」といっているように、岩手の自然を讃え、環境の重要性を毎年のように説いているのである。

人間は自然の子であり、自然と共に生存すべきものであり、医療を含む諸科学の根底に、生存秩序があり、人類の生存、人間の生活は、

その上に築かねばならないと信じている。

この時の武見先生は、色んな不都合に遭遇されている。列車事故のため到着が遅れ、一関に出迎えた医師会の事務局長に会えず、単身タクシーで前夜祭会場の陸前高田市に着いたものの宴会場を探すべく県立高田病院の門を自ら叩くなど御難続きで、あれほど豪胆な先生も疲労の色濃く、直ちにホテルに赴いたものだった。それでも接待に当たったわれわれに対しては喧嘩太郎の異名からは想像もできないような、いんげん、丁重なねぎらいの言葉をいただきその上泰然自若、恒に平常心を以て、敢然と事に当る先生を目の当りに拝見し、尊敬の念一入なるものがあり、少しでもその警咳に接し得た喜びを今しみじみと噛みしめている。(会員・岩手県・鶴浦喜八)

新規維持会員、寄付者の紹介

(昭和62年12月1日～昭和63年1月31日)

個人会員

左奈田幸夫 病院システム開発研究所会長

上原鳴夫 国立病院医療センター国際医療協力部厚生技官

廣畑富雄 九州大学医学部公衆衛生学講座教授

柴田久雄 北里大学医学部教授

法人会員

慶応義塾大学医学部三四会

寄付

個人

開原成允 50,000円

高田 昴 40,000円

法人

(社)信託協会 3,000,000円

(株)協和銀行 975,000円

(株)三井銀行 1,305,000円

(株)三菱銀行 1,305,000円

退会

個人

岸 真清

ハーバード大学公衆衛生大学院武見講座活動報告

1月から2月にかけてのハーバード武見プログラム活動報告

武見研究セミナー

- Tuberculosis : Testing, Screening, and Prevention / Dieter Koch-Weser
- Community-Oriented Approaches to Malaria Control / John Wyon
- Social Science Contributions to the Understanding of Sexual Behavior and Disease Transmission / Barbara de Zaldondo
- Management of Leprosy Control : Research Priorities / Emmanuel Max

第4回武見フェロー 大前和幸

- Presentation of Research Prospects / Eustace Muhondwa
- Problems in Global Health Data Sets and Their Use / Chris Murray
- The Debate over Horizontal and Vertical Interventions in Health / V. Ramalingaswami
- Utilization of Health Services in Jordan : Individual, Family and Community Variables / Carla Obermeyer

生存科学研究所日報

- 1月16日 第37回生存科学研究会
- 1月18日 第3回武見国際シンポジウム第1回組織委員会
- 1月29日 ハーバード大学公衆衛生大学院学部長ファインバーグ教授研究所を訪問
- 2月6日 第8回維持会員制度推進委員会
- 2月18日 広報委員会
- 2月20日 第10回メディコ・エコノミックス研究委員会

* * * *

医薬品シンポジウム昭和63年にも開催予定

昭和62年7月下旬から8月始めにかけて、生存科学研究所とハーバード大学公衆衛生大学院武見講座との共催で日本において開催された、医薬品に関するシンポジウム「医薬品の開発と行政および倫理」とワークショップ「米国における医薬品登録のアート」は、医薬品開発にかかわる産業の問題のみならず、臨床試験に携わる医師の、医薬品に対するポジティブ・チョイスや被験者のインフォームドコンセントという積極的倫理の問題にまで広く深い討議を行い、産・官・学3者の協力によるこの問題への取組みのユニークな場として大きな成果を納めた。こうして各方面から、今後の継続的開催が期待されている。

昭和63年は日本において第3回武見国際シンポジウムが開催される年であり、日本での医薬品に関するシンポジウム開催は無理と考えられていたが、幸い、11月に小平専務と開原理事が訪米した際、ハーバードのゴール

ドマン教授はこのシンポの引き続いての開催のニーズから、次回を昭和63年中にアメリカで開催してはと提案された。これを受け、12月19日に開催された第4回研究企画委員会ではゴールドマン教授の提案の線にそってシンポの開催が討議され、1月16日の第5回総務委員会で承認された。その準備として、研究所内の医薬品に関する委員会を再編成、強化し、国際交流関係の委員会と協力してこれに当たることになった。

なお、昨夏開催された医薬品に関するシンポジウムの講演論文の1部は月刊誌『臨床医薬』及び『診断と治療』に順次掲載される。

* * * *

新年度へ向け新しい研究体制案固まる

3月開催予定の理事会を前に、より強力に研究を推進するための新しい研究体制が、第4回研究企画委員会、第5回総務委員会において検討された。

それによると、生存科学研究を行なう公益信託武見記念生存科学研究基金と財団法人生存科学研究所との両者を機能的に結び要として生存科学研究会を位置付け、その費用は基金が持つ。また、基金に、従来の研究所の自主研究に当たるものを含み、「武見理念」や「生存の理法」に関わる広範な研究のための、全く自発的な、いわば手弁当の研究会を多数作り、全研究会員の研究への参加の場を確保しようというもので、その費用も基金が持つ。これは同時に低金利下での苦しい財政状況のもとで、研究所の自主研究により重点的に財

源配分をし、それにより、基本的研究と社会展開をより強力に行なおうというものである。それ等の研究については既に具体的な案が準備されている。

* * * *

第3回武見国際シンポジウム

第1回組織委員会・実行委員会合同委員会

1月18日午後4時から、富国生命ビル中会議室において、今年わが国で開催される予定である第3回武見国際シンポジウムの第1回組織委員会・実行委員会合同委員会が開催された。

まず、大来佐武郎組織委員長の前により各委員が紹介された。多忙な折りにもかかわらず、多くの委員が参加されたことは、この武見国際シンポジウムの開催意義を物語るものである。そして、生存科学研究所より小平専務理事の挨拶ののち、実質的討議に移った。

開原実行委員長による進捗状況の報告、本シンポジウムの趣意書の審議、プログラムの概要・予定演者についての説明があり、これらについて活発な質疑応答があった。さらに、今後、準備事務局を東京大学におくことが了承され、とくに実行委員に対し今後の密接な

協力が依頼された。開催日は7月1日(金)、2日(土)(クローズド、場所：東京大学山上会館)、3日(日)(一般公開、場所未定)と決定。

* * * *

第3回講演会、広島にて開催準備

第8回維持会員制度推進委員会

生存科学研究所は、昨年、第2回講演会を岡山市で岡山県医師会の協力のもとで開催したが、今年は第3回を広島市で開催することが内定していた。2月6日開催の第8回維持会員制度推進委員会へは、開催予定地の広島から、広島県医師会の担当理事と事務局長が出席。講演会実行委員長に山口正民氏が推挙され、実行委員会が発足した。講演会では、医療・健康を取り巻く身近な問題に、生存科学の立場からアプローチすることとして準備が進められる。開催期日は本年秋。

このほか、維持会員制度推進委員会では、財団の活動維持のために維持会員が如何に重要であるかが説明された。それを受け、本年度予算目標達成へ向けての維持会員拡大活動に関して協議され、委員は勿論、役員始め全関係者の維持会員獲得努力が必要であると認識された。

第2回生存科学研究会総会の御案内

次回、第38回生存科学研究会は、昨年度第1回総会に次いで、第2回生存科学研究会総会となります。期日は4月2日(土)午後2時から5時、場所は大手町経団連会館9F。

一年間討議してきた今年度のテーマ「国際競争と生存科学」について、大江精三先生から総括的なお話を頂く予定です。

さらに、来年度の研究テーマ、研究のあり

方を全員で討議して決める大事な総会となります。総会へは、研究会会員の他、維持会員、研究員の方々も御出席頂けますので、皆様の御参加をお待ちしております。

なお、総会終了後、銀座の財団会議室において懇親会を行ないます。是非お立ち寄り下さい。

公益信託武見記念生存科学研究基金ニュース

武見資料集・記念論文・文集編集準備を完了

基金では、かねて武見太郎先生の論文・講演等にかかわる全資料を網羅する「資料集」と関係者による武見記念論文並びに武見記念文を集めて「記念論文集・記念文集」の出版を計画し、準備を進めてきたが、資料集については図書館情報大学藤川学長を中心として、既に準備を完了。記念論文・記念文集については昭和大学小泉明教授を中心として原稿の収集を完了し、近く本格的な編集作業に入る。

応募記念論文は21編、記念文は15編で、世界医師会関係者、ハーバード大学関係者等海

外からも送られてきている。

一方、資料集の完成を待つように、生存の理法、生存秩序をはじめ数々の武見思想・哲学、理論とその実践を研究し、将来へ向けて発展するべく会員が自主的に取り組む研究分科会の発足が準備されている。

この研究分科会へは、研究会員全員の参加が期待されているが、更に新しく志を同じくされる方々が多数参加されるよう計画されている。

研究所ニュースに関するアンケート集計結果報告

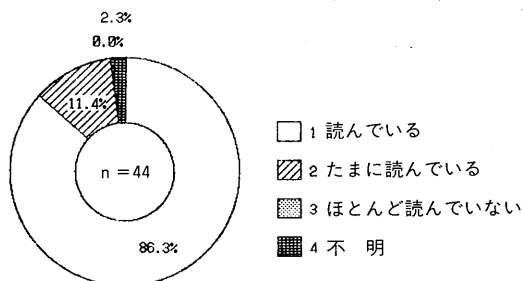
生存科学研究ニュース1月号と一緒に郵送し、皆様の御協力で御回答を頂いたアンケートの1月末迄分の集計ができましたので中間的な御報告をします。アンケートは、研究所維持会員の方々を対象としたものと、維持会

員以外でニュースをお送りしている方々を対象としたものとの2つのグループに分けられます。アンケートの発送は1月中旬でしたが、今回は1月末までの回答を集計しました。集計結果は以下の通りです。

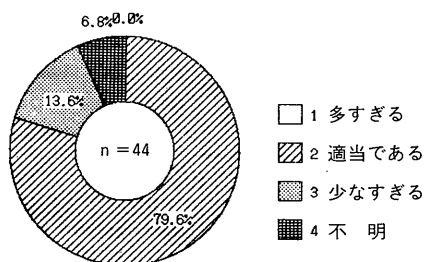
* * * *

[1] 生存科学研究所ニュースに関する維持会員向けアンケート (回答総数44)

1) 生存科学研究所ニュースを毎号読んでいらっしゃるでしょうか

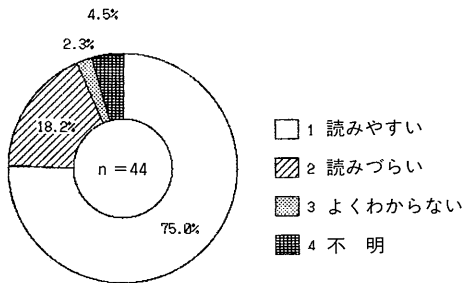


2) ニュース紙面の枚数は適当だと思えますか。

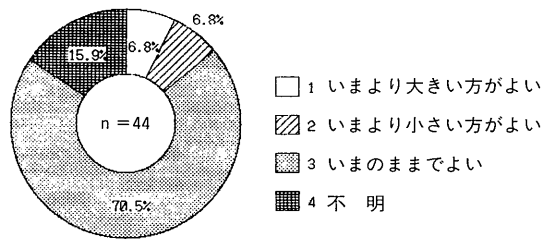


3) 活字体についてお伺いいたします。

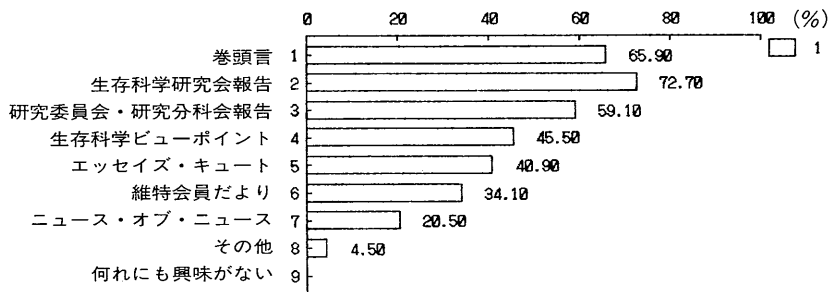
[書体]



[大きさ]

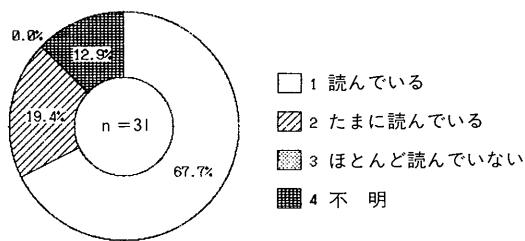


4) ニュースのなかでどの記事に興味をお持ちですか。(複数回答可)

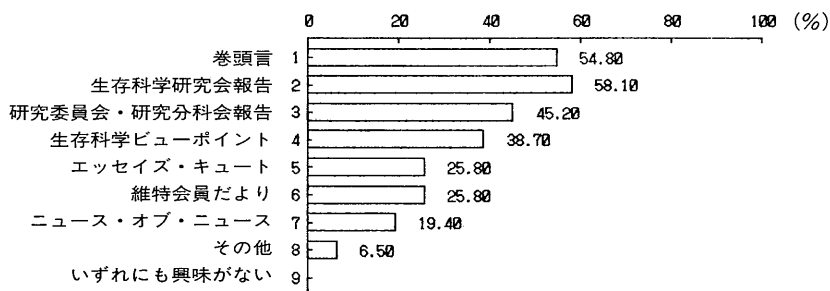


[II] 生存科学研究所ニュースに関する維持会員以外向けアンケート (回答総数31)

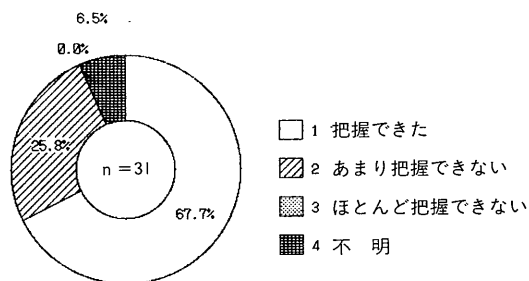
1) 生存科学研究所ニュースを毎号読んでいらっしゃいますか。



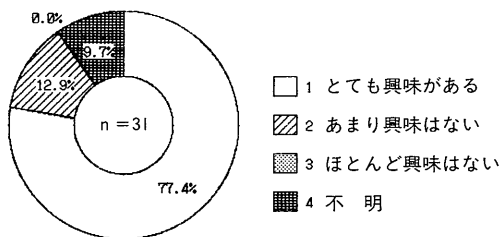
2) ニュースのなかでどの記事に興味をお持ちですか。(複数回答可)



3) 生存科学研究所ニュースをお読みになって、本研究所の活動状況を把握できましたか。

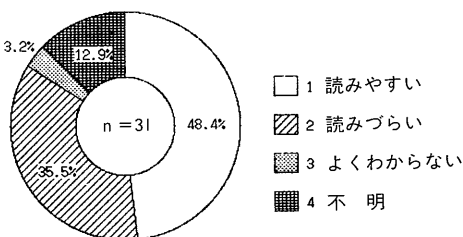


4) 生存科学研究所の活動に興味をお持ちですか。

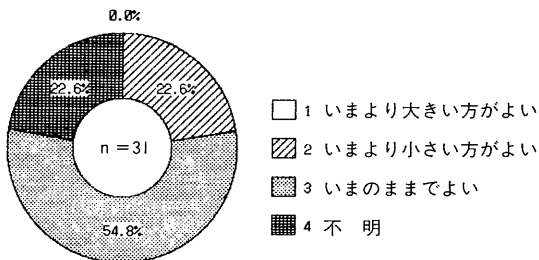


5) 活字体についてお伺いいたします。

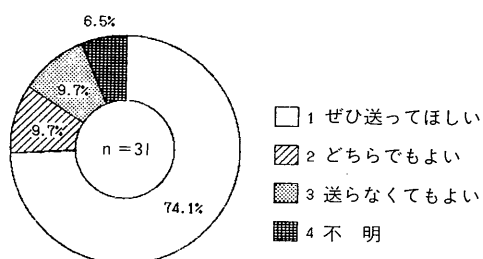
[書体]



[大きさ]



6) 現在、生存科学研究所ニュースをお送りしておりますが、今後とも送って欲しいとお思いですか。



維持会員から頂いた御意見

維持会員から頂いた御意見は23件ありますが、その要旨を御紹介します。

* 「生存の理法」に関する東西思想の比較についての研究論文の掲載を。

* 「生存の理法」を学問的にどのように具体化したか、一般社会にどのような形で還元していくかを紹介するよう。

* ライフ（生命、生活、生存）について多角的視点と文明論的視点が欲しい。

- * 基本論調、基本方向、基本理念をもっと分かりやすく明確に。ポピュラーなものも。
- * 生存科学研究所に関連する中央官庁の動向を。
- * 生存科学や地域医療に関係ある武見先生のエピソードを。
- * 医療および病院サービスの生命倫理的概論とメディカル・テクノロジー、クリニカル・ニードなどとの関わりを。
- * ヘルス・サイエンス（健康の科学）に関する討議をもっと豊富に。
- * 新しい学際的分野の活動紹介を。
- * 年2回ほど、研究会分科会報告のまとめを特集したら。
- * 毎号4～5ページ程度の論著（例えば生存科学ビューポイントのような）を。
- * 抄録的でなくもっと内容を載せるよう。
- * 凝縮した内容のより詳しい説明を。
- * 増ページして研究会、委員会報告をもっと詳しく。
- * ページ数は現状程度が良い。
- * 今後のスケジュールを。
- * ミスプリや文章に気を付けるように。
- * 生存科学研究所の存在をもっとPRすべきだ。

以上のほか、現在の活字体に対する御批判。なお、これに関しては御意見欄以外への付記も数通頂きました。

* * * *

集計の結果は、広報委員会で検討のうえ、総務委員会へ報告し、今後のニュース、広報の改善と、研究活動の向上に反映させていきたいと思います。なお御意見の中には、財政上の都合等により、直ちには御期待に添い得ない御要望もありましたが、今後の努力目標といたします。

維持会員以外の方からの御回答では、生存科学研究所の活動状況を把握できた、生存科学研究所の活動に興味をもっている、研究所ニュースを今後も送ってほしい、という方が7割もいらっしゃいました。アンケートに御回答を寄せられた方だから当然と言えるかもしれませんが、編集委員一同大変心を強くし、感謝しております。

御協力誠に有りがとう御座居ました。今回に限らず、研究所またはニュースへの御意見・御要望がありましたら、研究所または編集委員会へ随時お送り下さるようお願いいたします。 (広報委員会)

— 編 集 後 記 —

年度末で、大学も官庁も研究所も多忙な時期です。その多忙の中、今年度に固まった研究体制の基礎の上に、来年度は更に多局的、積極的な研究を可能にすべく、準備が進められています。財団と基金との研究連携体制も強化されるでしょう。

この多角的な動きを充分にお伝えできるよう、ニュース編集に努力しているつもりですが、至らぬ点も多いと思います。ニュースのアンケート調査に御協力頂き有り難う御座居ましたが、今後とも御意見をお寄せくださるようお願いいたします。 (N)